

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年10月14日(火)

【雑感】働き方SP

休日には心身を休める日であるが、私は休日の使い方がとても下手だ。いつもあつという間に過ぎる。遊びの計画を立てても、教師の性というか、いつ何時も仕事のことが頭から離れないのだ。これではプロとはいえない。何故なら、教師の仕事は「休む」ことも含まれるからだ。仕事にメリハリを持たせ、休む時は徹底的に休むことで、子ども達への接し方も変わる。笑顔も増える。タラタラと仕事をするとミスも増える。ミスや心配事が増えると笑顔が減り、業務への影響が出る。子ども達や保護者は我々教師に何を求めているのか？元気で、うつうつとした姿なのではないか。私自身、教職に就いた頃は遊び惚けていた、しかも夜通し。それでも朝から元気に出勤し、子ども達と向き合っていた。エネルギーに満ち溢れていた。

働き方改革

世の中に「働き方改革」が叫ばれ始めてかなり時間が経ちました。これまでも私は働き方改革＝意識改革だと思ってきました。一般的な働き方改革の目的は「一人ひとりの意思や能力、個人の事情に合った多様な柔軟な働き方を選択可能とする社会を追求していくこと」で、労働者にとっての働きやすさを実現していくことです。働く意欲のある人が無理なく働けるようになることで、社会全体にとっても良い影響が期待できるといいます。我々教師にも同じことが言えます。しかし、更に言っておきたいのは、業務改善と労働時間の削減により、子ども達と向き合う時間を確保することこそが重要なのです。教師の働き方改革とは、我々教師がラクをするのではなく、教師の本来の立ち位置に戻ることにあります。業務の無駄を削ぎ落とし、本来業務に費やす時間を産み出すことが重要なのです。今でも働き方改革ができていない人はできています。どれだけ仕事が増えよう、業務にかけられる時間は同じで、そして確実に成果を上げていく人もいるのです。私もそうありたいと願っています。

遊びも改革！

最近、この企業や組織も「働き方改革」が叫ばれ、勤務時間の短縮や業務の効率化が実施されています。働き方改革って結局のところ、個人の意識改革だと私は思っています。何故なら、誰でも自分の趣味や息抜きはしていますからね。本来、学校の働き方改革は、業務改善によって子ども達と向き合う時間を確保することこそ重要をお話しています。私もそうです。業務の改革を図り、捻出された時間は、子ども達と向き合い、更には家族と向き合い、そして更には趣味の時間に費やしています。先日、フットボールを作っていたら、途中接合剤や塗料を乾燥させる時間がもったいないことに気が付き、隙間時間を作らないようにするため、別のフットボールを並行して作るようになりました。塗料色と同じものを複数個制作することや、同じ作業を同時に行う等によって、作業の効率化も実現しました。結局製作にかかる時間は殆ど同じで、複数のフットボールが一度に完成しました。これが改革だと感じています。仕事を3つほど並行すると効率が良いようです。この後、家族からは「また遊びよる…」と不満が…。産み出された時間の振り分けが課題となっています。

シリーズ「自分を語る」#42

私が嘉島西小学校の1年目担任させて頂いたお子さんは先天性の病気で、胎内での何らかの異常により脊髄が脊柱の外に出て、痙攣や損傷を起こしている状態でした。その影響で下半身の麻痺や変形、膀胱、直腸の機能が低下していました。歩行はできませんでした。学校での生活は殆ど交流学級で過ごし、国語と算数の学習を私とマンツーマンで行っていました。おまさんの実態から、現在でも自立活動を過ごす時間ほ実施していましたが、今考えてみれば、将来日常生活を送る上で必要な「何か」をもっと伝えなければならなかったような気がしています。このお子さんなら43歳で、元気に働いています。下半身の麻痺がある関係で、排泄のコントロールを自分で行う必要がありました。自分の身を守るために必要なことなのです。現在では、特別支援学級の教員課程の中に「自立活動」が位置付けられています。この活動の中で将来身に付けておくべきことを、学習を通じて身に付けていくのです。話が難しいので面白くありません。とにかく、私にとっての1年間、個人の教育に対する「1人」をどのようにして育み出していくか、そのことに集中して取り組んだことができた1年でした。さて、嘉島西小学校での1年目、特別支援学級を立ち上げ、更には交流学級の担任が初任者だったために、交流学級の仕事をさせて頂くようになっていました。担任の先生と協力して、PTA行事を行ったり、担任させて頂いた子の療育キャンプに参加したり、一足の前で積極的に動き回りました。「楽しかった」「悔いはない」と思える1年を過ごすことができた。黒石原での教員生活に感謝しました。子ども達も楽しく過ごしたこの「居場所」づくりに専念することができた1年でした。嘉島西小2年目担任、澤田敦子7歳の春です。春休みのある日、校長室に呼ばれた。澤田先生、特別支援学級の立ち上げについては、有難うございました。交流学級の子ども達もとても仲良くなっています。来年度もお願いできますか？私の希望は通常学級担任をさせて頂いていただくので、この時は恥ずかしなからしはうへの間こねてしまいました。組織人としての自覚が足りなかったのです。次の日、この時点で私はつまり、特別支援学級担任1年目と聞いていました。再び、校長室に。澤田先生、先生のお気持ちはよく解りました。しかしながら…云々…という訳で、今年は〇〇さん(支援学級担任)の交流学級の担任をお願いしています。「えっ…？」早い話が、〇〇さんと交流学級のどちらも見えてくたさいとのことなのでしよう。保護者との連携もうまくいっていますし、私にとっては願ったり叶たりでした。特別支援学級でも残り残したとありますが、通常学級の担任は私の念願だったからです。学校としても交流学級と支援学級の隙間を埋めるという視点で考えた場合、一石二鳥だったのでしよう。このような視点が持てたのは、黒石原養護学校での経験があったからかもしれません。そして、ここから私の高学年担任オンパレードの始まりとなっています。(つづ)